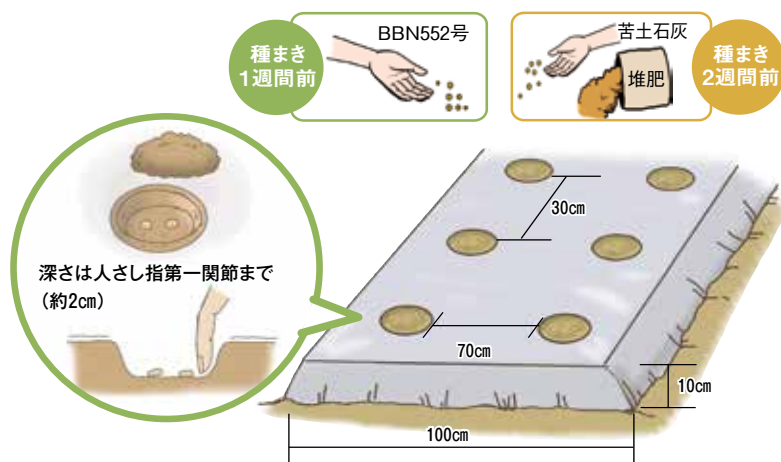


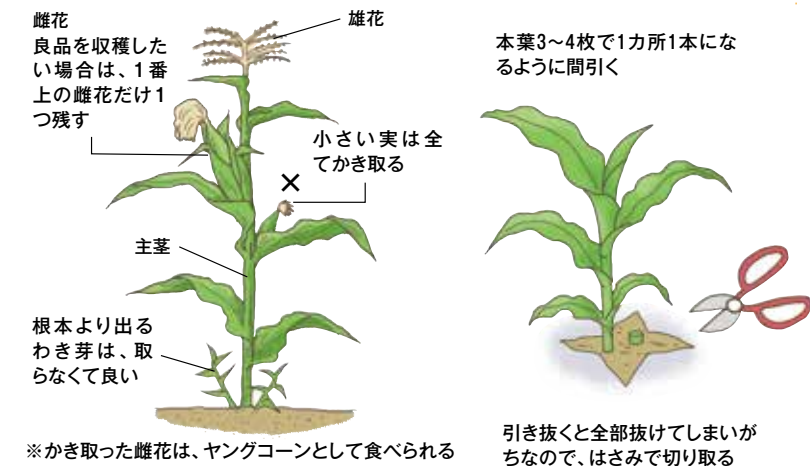
本葉が4枚程度になったら一本に間引きます。根痛みを避けるため、抜かずにハサミで切り取りましょう。本葉が7枚程度になった頃と雄花が出た頃に追肥をします。マルチがしてあれば穴から肥料を入れます。土寄せも行います。マルチの上からでもいいので、株元に土を寄せて倒れにくくします。わき芽が出てきますがそのまましておきます。根が増えて倒れにくくなります。

間引き・追肥・土寄せ



高温の季節が長いと害虫が発生しやすくなります。特にアワノメイガの被害が目立ちます。茎に食い込み、折れることもありますが、何より実に入り込んで商品価値がなくなることが問題です。雄花が出るあたりから農薬散布などで対処します。

管理



甘くて美味しいトウモロコシに挑戦しよう!

収穫

雌花のひげが出てから3週間くらいして、ひげが褐色になり先端の実が黄色くなった後収穫です。高温では収穫5時間後から糖度が減ってくるので、やはり収穫したらすぐに食べるのが一番おいしい食べ方です。

おすすめ品種
大和ルージュ
1月号で紹介した、日本初の真っ赤なトウモロコシ。茹でると赤が出てしまうので、色を楽しむなら丸ごと焼くかレンジで加熱しましょう。

おおもの
甘さもサイズもヘビー級! 糖度20度を狙える極高糖度、しかもずっしり大きな雌穂。地温を上げて播種し、乾燥に注意しておおものを作ろう!



ほうさくClub!



「トウモロコシ(スイートコーン)」に挑戦!

★これがトウモロコシのスケジュールだよ。Calendar

1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
					種まき						
						収穫					

●施肥基準 (1㎡あたり・一例) ■苦土石灰150g ■堆肥2kg ■BB552号100g ■BB追肥N30号20g×2

文中の肥料等は一例です。地区によっては違う種類で対応している場合もあります。不明な点は、営農相談員にお問い合わせください。

種まき、定植の2週間前までに苦土石灰と堆肥を入れて深く耕し、1週間前までに肥料を入れてよく耕します。幅100cm、高さ10cmの畝を作り、マルチを張ります。70cm間の2条で、株間30cmで穴を開けます。

畑の準備・定植

世界3大穀物の1つで、しかもその中で最も生産量が多いのはトウモロコシ。野菜というより、圧倒的に穀物としての利用が多い作物です。世界トップクラスの輸入国である日本は飼料として消費しています。

トウモロコシは紀元前3千年頃にはメキシコあたりで、紀元前2千年頃には南北アメリカ大陸の広い地域で栽培されていたと考えられています。15世紀にコロンブスがヨーロッパに紹介、16世紀にポルトガル経由で日本に入り、「ナンバンキビ」と呼ばれ、田畑が無いような地域で作られていました。明治初期に北海道開拓時に導入され、以降本格的に日本で栽培が始まりました。

なんと日本中に「トウキビ」や「ナンバン」「トウムギ」「トウマメ」など、200以上の呼び名があるようです。長野県内でも様々な呼び方があるので、会話の中でトウモロコシの話なんだとわからない場合もあるかもしれません。

直接種をまくなら、地温が14℃以上になっていることが理想です。地温が低いと極端に発芽が悪くなります。地温を上げるためにも黒マルチを使うことをお勧めします。ポリポットで苗を作ることでも可能です。植えたい時期の1か月前から用意しましょう。6〜9cmポットに培養土を入れて種をまき、本葉が3枚程度になったら定植です。ハウスや暖かい室内で育てましょう。いずれも1か所に2〜3粒まき、2cmの深さに覆土をします。

種をまいたらたっぷり水をやり、乾かないように不織布などで覆っておきます。直まきの場合には特に、鳥の被害を防ぐためにも必要です。

なお、一つの畑に品種は1つだけにした方がいいでしょう。多品種を育てるとそれぞれが交配してしまい、本来の品種が発現しない「キセニア」が発生しやすくなります。例えばほうさくクラブ1月号で紹介した「大和ルージュ」と違う品種を同じ畝にまいてしまうと、黄色と赤の粒が混じり、食味や甘さなど本来のものではなくなってしまうます。花粉が良く付くように株間は短めにして栽培しますが、意外と遠くまで飛ぶので違う品種の畝まで数m〜数十mは離しましょう。

